

月例研究会（2023年5月24日）

## 「余白」と散種

長原 豊

大原社研の叢書として2023年3月に法政大学出版局から刊行した『「論争」の文体——日本資本主義と統治装置』について、報告した。

当初は冒頭の題目で、日本資本主義論争を〈68年〉後の思想状況から遡及的に読み直す作業に当たって採用した理論的枢要について報告する「気分」だったが、執筆者全員を貫串する共通点の報告は凡庸と考え、代表者の一人である僕が執筆者に提示した理論的枠組を今後予定している2つの論放のうちの1つである「燻り続ける灰とその散種——2つの余白とその充填—代補」の枠組についてお喋りすることで、〈68年〉後における日本資本主義論争の読解lectureを駆動した気分Stimmungを当該期のそれに重ね合わせて、伝えようとした。

「喋り」「伝え」に傍点を付したのは、執筆者に共通する〈68年〉後という「状態」、つまりアリストテレスのHexisとブルデューへ連なるアクィナスのHabitus、また何よりもHabitusと並んで読解を衝き動かすPassioを、僕自身の報告文体を通じて、論ずるのではなく、「喋り」「伝え」ようとしたからである。

本プロジェクトの研究会では、各人がみずからの読解について「喋る」ことはあっても、それぞれの読解が「伝え」られただけであって、他のメンバーはそうした他者の「読解」を理解するというよりも、むしろ「知る」あるいは「識る」ことに終始するという、非権威的の雰囲気を持続した。その意味で僕が今回の月例研究

会で参加者に「伝えた」のは、決してお行儀が良い学者然とした「物言い—防衛」ではない。ここでは「為にする議論—反論」は防遏されている。

そのうえで僕が「伝えた」第1の論点は、論争は、科学的真理なるものをぶつけ合って「正しい」分析を得、それに基づいて「正しい」革命と「正しい」社会を語り合ひましょう、などといったものではなく、書籍市場における「受け」も含めて、論争者が互いにフーコーのいわゆる「真理陳述 veridiction」を披瀝しあう政治過程だったということの再確認である。つまり、客観的というよりも、むしろ個別の主体がその世界観にしたがって己の言説が真であることをぶつけあう政治的邂逅が論争であった、と僕は伝えた。また本書の各執筆者は、それを〈68年〉後において、論争者の文体を借りて反復的に読解し、それを筆跡的書記とした。

第2に、与件である日本という国民国家—<sup>しん</sup>民間空間の固有名を冠された資本—<sup>イデオロギー</sup>主義 capitalism は、大文字の資本 Capital の理論的夢想とは異なり部分的であるがゆえに平滑空間にとつての残滓として出現する「不得手な」領域を避けられず、この残滓の領域をいかなる統治装置を用いて外部においたまま内部化—捕獲（鹵獲）するのかという点に関わって、空虚としての天皇—制の分析を欠いた日本資本主義の読解は、現在も、無意味であることを「伝えた」。

さらには時間と紙幅の関係で書き切れなかった論争者の〈「気分はもう」革命〉について、次のように僕が代弁した。Die Stimmung überfällt. Sie kommt weder von »Außen« noch von »Innen«, sondern steigt als Weise des In-der-Welt-seins aus diesem selbst auf. つまり、気分は突如として舞い降り、理論は気分が遅れ、言い訳する、と。

（ながはら・ゆたか 法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員）